

関西学院大学 ライティングセンター

特集：ライティングチューター座談会（前編）

- 学部生の文章指導・支援でお困りのことはありませんか？
- ライティングセンターで可能な支援についてより詳しくご紹介します
- ライティングセンターでの支援が支援者側（大学院生）の学びに繋がることもあります

本ニュースレターでは、ライティングセンターで学部生の支援にあたっている大学院生スタッフ（チューター）を迎えて実施した「ライティングチューター座談会」での内容を取り上げます。

学部生のレポート執筆や卒業論文執筆を支援するライティングセンターの役割について、チューターの声と共にご紹介します。学部生の文章執筆支援の場として、センターをご活用ください。



お問い合わせ先

教務機構ライティングセンター（平日9:00 - 17:00）

西宮上ヶ原キャンパス大学図書館地下1階

TEL：0798-54-7459

Email：writingcenter@kwansei.ac.jp

座談会メンバーのご紹介

※所属・勤務歴は2023年1月末時点のものです。



インタビュアー：杉原 健
2022年度センター専属スタッフ



菊池 民枝 さん
経営戦略研究科
チューター歴 1年半



堀 祐輔 さん
人間福祉研究科
チューター歴 2年



山下 茉莉花 さん
社会学研究科
チューター歴 2年

杉原（以下、杉）：皆さん、今日はお集まりくださりありがとうございます！この座談会は、科目でレポートを課す先生や、ゼミで論文を課す先生の中には、学部生の文章執筆指導に苦勞している先生がいっぱいという現状を踏まえ、**ライティングセンターではどのように学生さんをお手伝いしているか紹介したい**という思いで実施しました。

菊池（以下、菊）：これまでたくさんの学部生がセンターの支援を求めて来室しましたもんね。

杉：そうなんです。ですので、支援に携わっているチューターの皆さんの立場から、ライティングセンターでの支援の様子について語ってほしいと考えています。今日はよろしくお願いたします！

Point 01 学生の気持ちに寄り添った支援を

杉：まず、チューターさんたちはセッション（ライティングセンターで実施している個別支援の通称）でどんなことを意識していますか？

山下（以下、山）：自分は自分自身で書いた文章をやっぱり肯定してほしいんですね。来てくれる学生さんたちのことも肯定することで、**学生さんには自信をつけてほしい**。だから自分が学生だったらこんな支援してほしいなということを考えながら支援にあたる、というスタイルをとっているかもしれないです。学生が書いたものにチューターの意見が入らないように、文章を変えるんじゃなくて、組み替えを提案するとか。

菊：私は、**自信がない子が多いので、背中を押す**ことを意識しています。私も、自分が学生の立場になった時に、支援者に背中を押してほしいからかもしれないです。

杉：なるほど。支援者として、学生側の気持ちに寄り添うということですね。そういえば、セッションを複数回利用する学生もいましたね。

菊：繰り返し来てくれる学生さんは特に記憶に残っています。**色々なチューターさんたちに何度も文章を見てもらうと、文章の組み立てが少しずつできるようになってくる**んですね。レポートを通じて自分を表現していく中で、書くことを好きになってほしいっていつも思っていましたね。

Point 02 剽窃はダメ！ オリジナリティを大切に！

堀：私は、研究とは先行研究や調査したデータを整理・分析し、結果や自身の考え（考察）を書くものであり、レポートはそのコンパクトなものだということを学生に伝えるよう意識していました。

杉：その支援のあり方も大事ですね。

堀：はい。その点に少し関連するんですが、相談学生の中には「友達の文章」を見ながらレポートを書くように「模範解答」を書くことが大学での学びだと誤解し、学問や研究そのものを知るチャンスが失われる事態は防がねば、と感じました。

菊：私が支援した時にも「友達の文章を見せてもらいながら書いたんですけど、これは剽窃にあたりませんか」って聞かれて、「**人の書いた文章をそのまま写してしまったら剽窃になりますよ**」って伝えました。

杉：今なんて、Turnitinのような剽窃チェッカーにレポートを入れたら、どれくらい文章が重なっているかすぐ分かりますもんね。

菊：「他の方の文章を読んで学んだり参考にしたりする分には良いけれど、**そのままコピーするのはダメ。自分が何を言いたいかをレポートに書くのが大切で、あなたが授業を受けて、本を読んで、何を感じたのかを書きましょう**」って伝えました。

杉：「先生は、自分で調べて考えて、っていうプロセスを楽しみにしてくれてると思う」っていうメッセージは学生さんたちに響くと思います。剽窃や盗用は絶対にダメだ、と分かってもらう必要がありますもんね。とは言え、卒業するために単位をとりたい、っていう短期的ゴールを持つ学生さんへの配慮も必要で。そういう中で本当にチューターの皆さんは頑張ってくれました。



座談会撮影者 中俣 旭日さん（人間福祉研究科／チューター歴 半年）

書く前でも書いている途中で大丈夫！

アイデアを言葉にする手助けをします

杉：現状、センターのセッションは1回生の利用が多いですよ。特に春学期は「レポートって何なのか分からない」というお悩みも多く受けていました。

山：「レポートには**序論・本論・結論**ってというのがあってね…」とか**主張・根拠・論拠**だったりとか、基礎的なものをセッションを通じて伝えていました。春学期はブレインストーミングを一緒にやってみることも多かったですね。

堀：「**スタディスキルセミナー（レポート執筆の基礎）**」のような**ライティングの授業**を受けたことがないという学生さんだったら、私は最初の20分くらいでライティングのための基礎的な事柄を伝えますね。たとえ文章が書かれていても、**一度ブレインストーミングから始め直す**こともあります。学生が書いてきてくれた文章を書き換えさせる、というのがどこかその学生自身を否定してしまっているようで気が引けるんですが、**文章から一度離れて考えを喋ってもらうことで一緒に論理を吟味しやすくなる**んです。

山：ああ、否定したくないっていうのはわかる。どうしてもチューター側の主観が入ってしまうけど、学生さんの気持ちに寄り添ってセッションを進めたいっていう思いは自分もあります。ただ、自分は相手の気持ちとか考え方を判断する材料が文章の中に表れているっていう風に捉えるタイプだから、文章を持ってきてくれた方が支援がしやすいです。

菊：今年度の春学期は事前に資料が無かったり、まだ文章を書き始める前の段階だったり、という学生さんが多く来てくれていたように思います。セッションの場で初めて文章を見るからこそ、チューター側の主観を入れずに、**学生の言いたいことを引き出す支援ができる**という良さもありますよね。

杉：文章がある程度書けている状態でもいいし、全然書けていない状態でもいい。いろいろな形での支援があることを先生方に知っていただきたいですね！

「伝わりやすい文章」ってどういうこと？

対話を通じて学びを支援します

菊：文章はある程度書けている場合でも先生の指示に沿っていないこともありますよね。内容はいい感じなのに、問いに全く答えていないみたいな。

堀：ありますね。その場合は私だったら、書かれている中身にはいったん触れず、「**どんな課題ですか**」とか**聴きながら基本的なポイントを確認していく**ところから始めます。その後に文章をみますね。

菊：私はその学生さんに文章の中で「あなたが言いたいのはどの部分ですか」というのを尋ねるんです。そこに色をつけてもらって、その主張とテーマとの関連性を聞いてみたら、「あ、（出されているお題と）違いますね」とって自分で気づいてくれた子が実際にいました。

山：私だったら先に、**問いと答えがズレてしまっていることを柔らかく伝える**かな。「課題が難しいね」とかフォローしつつ。問いと答えにズレがない部分があれば「そっちを軸に内容を考えてみようか」と伝えます。

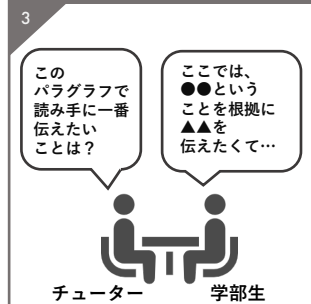
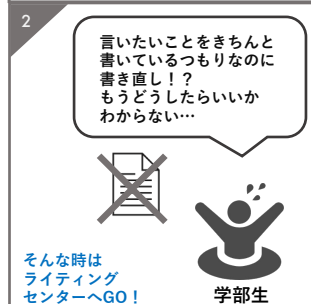
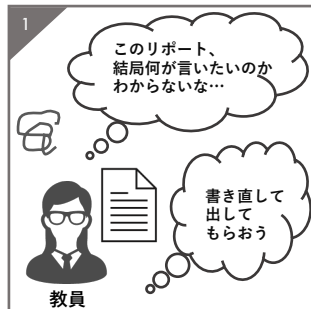
堀：学生がセッションの中で説明してくれた内容について、「**今言ってくれたこと、どこに書いてありますか**」って聞くと「**あ、書いてないっす**」ってことありますよね。「いや、それ書こうよ!」って（笑）。

山：学生からしたら「ここは当たり前の内容だから、省いていいだろう」とって考えたところなんでしょうね。自分も言われたなあ。今説明したやつを...（笑）。

杉：そのまま書いてくれると...（笑）。

菊：そうそう（笑）。

杉：「**伝わりやすい文章**」を書くために、**どんなふうに段階を踏んで書くべきかについて、対話を通じて気づいてもらえるよう支援したい**ですね！



科目名「スタディスキルセミナー（レポート執筆の基礎）」

- 学部生を対象に、論理的な文章を書くことを目指した申込制科目が毎学期開講されています。1回生が主な対象者ですが、2回生以上も受講可能です。ゼミ生等にぜひご周知ください。
- 授業内容の詳細は、ライティングセンターのニュースレター vol.03 でもご紹介しています。

学生自身も気づいていない 問題に気づかせる

杉：学生側がセンターに持ってきた相談内容とチューター側が文章においてより大きな問題だと思えるポイントとが一致しない、という事態は結構多いような気がします。

山：ありますね。そういう時は最初の5分が要（かなめ）かな。私は最初に学生さんの方の悩みに応えてあげたい。なので、まずは**学生さんの悩みを解決**します。その次に**チューター側が指摘したい点を伝えます**。だから、今日のセッションはこういう風（学生側の悩み→チューターが気づいた課題）に流れていきますよ、っていうのを学生さんに先に言うておくかな。

菊：私はセッションの最初の5分、色々話をするんですよ。その時に「**今日のセッションが終わった時にどうなっていたい？**」っていうのを聞きます。そうすると「表現をよくしたい」とか「一人で書けるようになりたい」とか（→）

菊：（→）言ってくれるんですね。じゃあ、それをやっていこうと。その上で、学生さんの思う課題かチューターが感じた問題か、どちらを優先して取り組みたいかを聞きますね。

堀：私はまず学生さんにレポートの概要を口頭で説明してもらいます。その中で「あ、たぶんここ（検討しないと）ヤバいだろうな」って見当がつく。あとはやりとりをする中で気づいてもらえるように話を持っていきます。

山：悩みを聞いている時にもっとヤバい点に気づく、あるあるですよ。

堀：よくあるのは、「参考文献をどう探すか」っていう質問で、「主張ありきの文献探し」になっているパターン。調べたことから何が分かるかを考えようね、って。

杉：一人では気づけなかった問題点に気づけるように工夫するのもセンターの特色ですね。自分の書いた文章に自信を持っている学生さんにも、ぜひセンター利用を促していただきたいですね。

最後に

ライティングセンターはどんな場所？：私がチューター経験で得た学び

杉：最後に、お三方は2022年度末でライティングセンターのチューターを卒業されますね。堀さんと山下さんは2年間、菊池さんは1年半にわたって、ご尽力をありがとうございます。皆さんにとって、ライティングセンターはどのような場所でしたか？



安息の地です。色々なところから学生もチューターも人が来るので、自分の専門領域とは違うところの人が集まってきます。なので、研究っていうものから離れて色々な話ができる場だったし、教える中で自分の文章やスキルを点検する目が養える場でもありました。



勉強になる場でした。学生さんに教えることで自分も知識が身につくし、自分の書き方の癖にも気づけました。本当に様々なタイプの学生さんが来てくれるので、「教える」という立場が明確になっている時にできるコミュニケーションの仕方も勉強になりました。



「人に伝わる文章」というのを改めて考えるきっかけになった場所でした。センターのチューター募集チラシに「あなた（チューター）のスキルもアップします！」みたいなことが書いてあって。それを見て応募したんですが、本当に文章執筆を見直すきっかけになって、ありがたかったです。

学生からのよくある相談

- ◆ 課題がきちんと理解できていない気がする
- ◆ 考えていることをどうやって組み立てていったらいいかわからない
- ◆ 締切ギリギリだけど最後に少しでも改善点を知りたい

→ 全体構成から一文単位までサポートします。レポート課題や卒業論文が支援の対象です。

ライティング個別支援の利用方法：

1. LINEやkwic、右下のQRコードから予約できます。
2. 予約フォームで希望の時間（1コマ45分）と形態（対面 or オンライン）を選べます。
3. 予約完了後、学生は事前情報登録フォームで課題締切などの基礎情報を送信できます。



大規模授業でのご利用等に関する個別のお問い合わせは1ページ目の連絡先までご連絡ください

【インタビュー後記】

ライティングセンターで活躍しているチューターの方々の試みを広く知っていただきたい、という思いから今回の企画が生まれました。次号（2023年秋頃発行予定）では、今回入りきらなかった卒業論文関係の支援やその他様々な企画（出張センター紹介、FDなど）にも焦点を当てて、ライティングセンターの活用方法を紹介していきます。（杉原）